

そのほかにも…

- ・「明解 歴史総合図説 シンフォニア 三訂版」p.70
- ・「最新世界史図説 タペストリー 二十二訂版」p.190

国策を映す巨大絵画はお蔵入りした……なぜ？

—ダヴィド「ナポレオンの戴冠」—

京都大学 名誉教授 杉本 淑彦 (すぎもと・よしひこ)

|| 1 || 皇帝ナポレオンの戴冠

1804年12月2日のパリ。この日、ナポレオンの皇帝即位を国民に告げる式典の一つが、ノートルダム大聖堂で挙行された。ナポレオンは、約5時間に及んだ聖堂内でのこの盛儀を含めて、一連の式典を画布に残すべく、あらかじめルイ＝ダヴィドに、4枚の絵を描くよう口頭で注文してもいた。四つの主題はナポレオンが決め、描くべき場面や人物はダヴィドに一任された。

だが、ナポレオン失脚時まで完成したのは2枚だけであった。その一つが、主題「成聖 sacre (聖油により神とつながること)」を造型したもので、12月2日の式典を描いた通称「ナポレオンの戴冠(式)」である。

1808年初頭に完成したこの絵は、ルーヴル美術館内で開催された同年のサロン・ド・パリ(官展)において初公開された。宮殿や議事堂ではなく、当時は入場無料であった国立美術館においてまず展示されたことは、即位式典を、政権を身近で支える政治家・官僚・軍人だけでなく、広く国民の記憶に刻むことを、ナポレオンが意図していたことを物語っている。

|| 2 || 「ナポレオンの戴冠」はコンコルダート由来の産物

ダヴィド作「ナポレオンの戴冠」の描写内容は、ナポレオン政権の対カトリック教会政策との関連で説明されることが多い。即位式典に先立つ1801年にフランス共和国とローマ教皇が政教協約(コンコルダート)を結び、フランス革命以来対立していた両者は一定の和解に達した。革命期に無償接収された農地など教会財産の返還を教皇側はもはや求めず、一方、聖職者には共和国からの俸給支給が認定された。ナポレオン政権にとっては、いまだカトリック信者が多い一般民衆を「フランス国民」として統合しつつ政権基盤を固めるうえで、教会との和解が重要事だったのである。こうして、教皇を聖堂内での皇帝即位式典にも招くことになり、教皇側もそれに応じた。

ダヴィドは教皇ピウス7世と多数の高位聖職者を画面に登場させた。当日は疲労から列席を辞した枢機卿カブララも描かれており、それは、教皇側で政教協約合意に深くあずかった人物だったからだろう。そして、聖堂での式典であったことも左壁面の正十字でもって示されており、カトリック色が丁寧に描き込まれた絵である。

だがこの絵は、指定主題の「成聖」ではなく「戴冠」を描いている。現在の所蔵館であるルーヴルによる公式名称だと、「ナポレオン1世の成聖と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠(couronnement)」であり、皇妃が中央でナポレオンから冠を授けられようとしている。現実の儀式は二段階から成っていた。第一段階でナポレオンは教皇から聖油を受けて成聖され、第二段階で、ナポレオンはみずから手で戴冠し、次いで妻に冠をかぶせたのだった。

ダヴィドが戴冠場面を描いたのは、カトリック色の濃い成聖儀礼を絵にすることを忌避したからだと考えられる。ダヴィドは、バステューユ牢獄襲撃に参加し、急進的なジャコバン派の国民公会議員として国王ルイ16世の処刑に賛成票も投じ、さらに、最左派のロベスピエールと活動を共にもしてきた。旧体制を支えてきたカトリック教会とは一線を画す政治信条の持ち主であった。

この絵は、教会との和解を目指すナポレオン政権の国策と、一方で、革命派が抱き続けていた反教会の心性を、二つながら垣間見せてくれる、まさに時代の産物である。だが、1か月半の官展(1808年)が終了するや、絵は倉庫にしまわれ、その後のナポレオン体制期を通じて日の目を見ることがなかった。なぜだろう。

|| 3 || お蔵入りの理由 —『ナポレオン法典(フランス人の民法典)』を絵画化したものの……

ナポレオンが自身の手で冠を戴く場面が描かれなかった理由として、よくある解釈に、それだとナポレオンが傲慢に見えるのでダヴィドは不適切だと考えた、というものがある。しかしここでは、実際に描かれたものに着目したうえで、1804という年について考えたい。

この年の3月21日に『ナポレオン法典』が公布され、その中に、次のような条文があった——「夫は妻を保護し、妻は夫に服従する義務を負う」(213条)、「妻は夫と同居し、かつ夫が居住すると判断した場所にはどこにでも夫について行く義務を負う。夫は妻を受け入れ、かつその能力と身分に応じて、生計にとって必要な物をすべて妻に提供する義務を負う」(214条)。

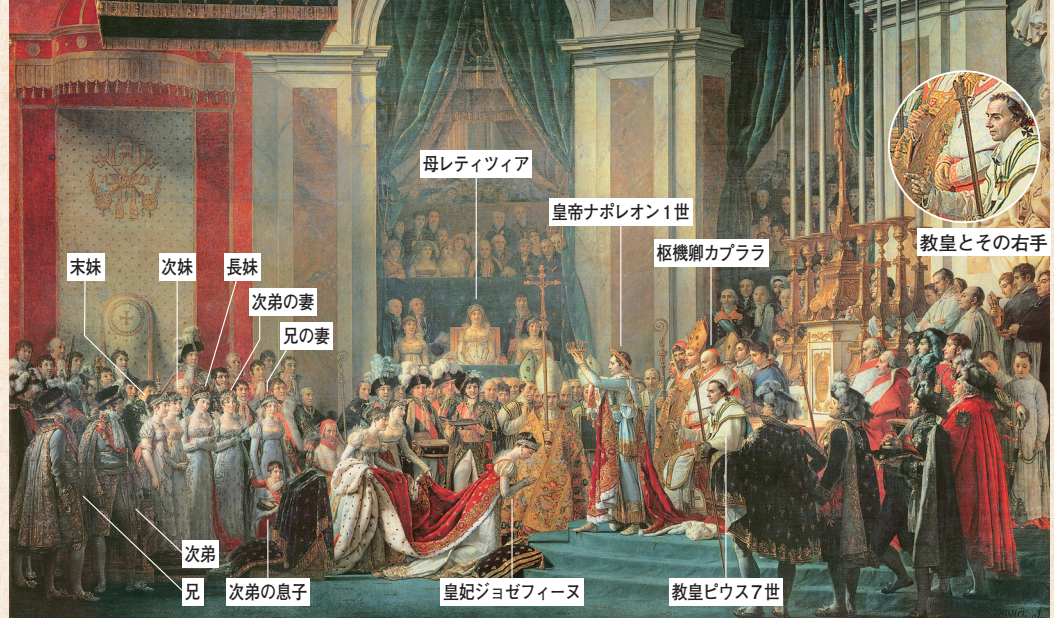


図 ダヴィド「ナポレオンの戴冠」(ルーヴル美術館蔵、621cm×979cm)(写真提供 ユニフォトプレス)

フランス革命は女性差別を内包していたという問題点が近年の研究ではよく指摘されるようになり、教科書『明解 歴史総合』と『新詳 世界史探究』(帝国書院)でも、女性活動家グージュを取り上げて、この問題が説明されている。

『ナポレオン法典』にも不平等な夫婦関係が規定されており、ダヴィドはそれを、肯定したうえで分かりやすく描いたのである。「妻を保護し」「生計にとって必要な物をすべて妻に提供する」夫たる本分が、妻に戴冠するナポレオンの立ち姿で、そして「夫に服従する」妻の本分が、跪礼姿で具象化されている。実際にもこうした場面が展開されたことは、皇妃付き内侍貴婦人職にあったレミュザ夫人回想録(1881年刊行)の中で、「とても優雅な跪礼でした」と記されている。

ダヴィド作「ナポレオンの戴冠」が『ナポレオン法典』の絵画版であることは、皇帝一族が丁寧に描き込まれていることからもうかがえる。法典の起草委員ポルタリスが草案作成にあたって語った「家族という小さい祖国を通して人は大きな祖国に連なる。良き国民を形作るものは、良き父、良き夫、良き息子である」という言葉が今に伝わっており、その精神である「男系を軸とする家族の尊重」をダヴィドは画像化したのである。兄と次弟の二人が前景に大きく描かれ、そして次弟の幼い息子(第一子)の身体からは、元気なさまがあふれ出ている。また、ナポレオンが共和主義者の長弟(式典欠席)と仲たがいでいることと、浮気歴がある嫁ジョゼフィーヌへの不満から、実際には列席を拒んだ母レティツィア(寡婦)が、一族の要のように中央に描かれもしている。

現実を改変してまで「家族の尊重」を強調するダヴィドの絵筆は、教皇のポーズにも及んでいる。画中の教皇は、皇妃に向かって笑みをたたえながら、右手の人さし指と

中指を伸ばす「祝福のポーズ」をしているが、実際の皇妃戴冠時の教皇は違った。自身が行うはずだと思っていた戴冠の大任を免ぜられたことから、教皇は両手を膝上に組んで座り「生贄の羊のように諦観」(レミュザ夫人回想録)している風だったと伝えられている。

諦観から祝福へとダヴィドが描き変えた理由は、鑑賞者が皇子の誕生を連想するようにしむけるためであった。大天使ガブリエルが聖母マリアに受胎を告げる聖書中のエピソードは、多くの絵の題材になってきた。とりわけ著名なレオナルド・ダ・ヴィンチとヴェロッキオ共作の『受胎告知』の中で大天使は、ピウス7世と同じ「祝福のポーズ」をとっている。青年期にイタリアで画家修行に励んだダヴィドは、その地で数多くの絵を目の当たりにしていた。ダ・ヴィンチの『受胎告知』も、当然のことにその一つだったのである。

画中での教皇の祝福が実を結べば、『ナポレオン法典』がたたえる「家族の尊重」は完結するはずだった。しかしそれは画餅に終わった。世継ぎの実子を望んだナポレオンは、遅くとも1807年秋には離婚を考えるようになり、その胸中が宮中で知られるようになった。ナポレオンは警察大臣に対して、離婚問題に口出しするなという、怒気を含んだ手紙を書いている(11月5日付)。1808年初頭に完成したダヴィド作「ナポレオンの戴冠」は、ナポレオンにとって、「家族の尊重」ではなく、「家族の崩壊」を嘲笑されかねない、苦いものになったのである。

ナポレオンは1809年にジョゼフィーヌと離婚し、翌年にオーストリア皇女と再婚する。「ナポレオンの戴冠」が再公開されるのは、1837年、七月王政期のことである。

〈参考文献〉

- ・帝国書院(2023)『明解 歴史総合図説 シンフォニア 三訂版』別冊史料
- ・杉本淑彦(2018)『ナポレオン』岩波新書